

山越え

伊藤永之介

「サクジ キトクスグ コイ」

十軒程家賃をかき集めて昼飯に戻ると、そう言う電報が来て居た。作治は三つの時脳膜炎で死にかけて。それが再発したのかも知れないと私は思った。主人に電報を見せ、かつきりの汽車賃を貰った。作治にもまた次の二人の弟にも何か持つて行ってやりたい。私はそれをつけ加えようと思つたが、黙つて主人の許を引き下つた。私は發育の悪い弟たちを思い、また殆んど固疾になつて了つた自分のひがみ根性を想いイヤな気がした。

午後二時上野を發つた。列車は空席が殆んど無い程に混み合つて居た。向い合せの座席に、顔のしなびたその癖頭髮の黒い中婆さんが、座席のしきり板と体の間に小さい風呂敷包みを挟んで、俯伏しに縮こまつて寝て居た。痩せてカラカラした体つき、少い頭の毛をうしろに束ねた具合、母によく似て居た。私は見てはならないものを見た気がして、思わず眼を反らせた。

六年前の冬のはじめ、私の十八のとき、父は急性肺炎で死んだ。その以前私のただ一人の兄と三人の弟が其処で死んだ本所のゴミゴミした長屋の一棟から、私たちは二つの古びた柳^{ヤナギ}梱と風呂敷包みと赤子を背負つて抜け出した。霽^{みぞれ}になりそうな冷い雨が、嘲けるように私達の持物を濡らした。作治は今までよりいいところへ行けると思つたのだらう、「どこの田舎へ行くの」と

眼を輝やかせた。雨に濡れた都会の灯は哀しく美しく私の眼に滲みた。末の勝治を生んだばかりで弱って居る母は、赤子を私の手に渡し、列車に乗り込むとすぐ座席に突伏して何時までも動かなかった。私には母がそうして私達から顔をかくして泣いて居るように思われた。

小山で乗込んだ客が座席をさがして居た。

恰度、向うからやって来た車掌が、

「もしもし」

と俯伏して居る婆さんの背中を白手袋の太い指先で突ツついた。婆さんは顔を上げ、ひどく脅おびえた眼をした。

「立って居る人がありますから、御遠慮願います」

婆さんは起き上り、あわてて窓際に押しつけられたように坐り直し、風呂敷包みを膝に置いた。まともに見ると婆さんの顔は矢張り何処か母に似て居た。

空いた半分の座席には商人風の男がやって来て腰かけた。

私に電報を打って間もなく作治は息をひきとったと言った。別家のお婆さんと母と弟二人、それだけが黙って静かに坐って居た。

お婆さんは私に代り幾度もお経をあげて呉れた。

私は作治の遺骸に近づき白カナキンをめくって見た。普段から綺麗だった作治は、皮膚が青白く冴え美しい顔をして居た。眉が殊に綺麗だった。一度だけ呼んだ町の医者の注射で両腕に紫の斑点が出て居た。口からも眼からも泡のようなものを吹き出して居る。私はそれをアルコールで

丁寧に拭き取ってやった。四つと七つの弟はキチンと膝を折って並び、からだを堅くして、脅えた眼でまじまじと蠟燭の火を見て居た。夜が更けると、何時の間にか二人くつき合うようにして其儘倒れて寝入った。その寝息だけが聞える静かな夜だった。母は感情の無い疲れた顔で、「お前よこれ物持って来ればよかったよ、洗ってやったに」などと私に言った。

「夜が明けたようだ」

母はそう言って居去り寄り、短くなった燈明をつけかえ、手を合せ何時までも首垂れて居た。チツ、チツ、チチツと云う雀の音が聞えて居た。私は母の静かな背中を見て居た。永い時間が過ぎた。写真などで見る母の若い頃は体も大きい方だった。が母のうしろ恰好は子供のよううなだに小さかった。私は幾人もの子供達に死別して来た母の労苦を想い続けて居た。

「おや、正、帰ったのけ」

伯母は愛想笑いをしながら出て来た。私は作治の遺骸を寺に送るのに使うから荷車を貸して貰いたいと言った。

「そうけ、それは大儀だなや」

伯母は障子のかげに消えた。私は承知したものと思ひ、荷車の置いてある方に行きかけた。伯父の声で、

「死人などツケたら、あとの用に立たなくなるべせ」

と奥で言うのが聞えた。伯母はあわてた様子で戻って来た。

「生憎な、会社の方で、町さ荷をつけて行くって言うてるもんでなあ」

酒造会社で伯父の家の荷車まで使う事の無いことは私は知って居た。私はカッとしたが、黙って戻った。途々伯父と私たちとの屈辱的な関係が胸に来た。

都会を逃れた私達は伯父の許に身を避けた。母の生家は離散して、北海道で坑夫をして居る母の弟の外はまるで消息が知れなかった。外に私達の行く先は無かった。私は近郷でも指折りの地主である伯父の家で、卑屈ないじけた様子でハイハイと下女同様に振舞って居る母を悲しい眼で見居なければならなかった。「落ちぶれもの」伯父たちは蔭でそう言い、私たちは箸の上げ下ろしも気詰りだった。ひと冬過ぎ、雪解けの頃、何時か私達は伯父の許から伯父の別家の養蚕などに使う汚い一棟に移ることになった。「一緒に居るのも何かと気詰りだから、この通り家族も沢山な事だしな……」伯父は私達がボロを詰め込んだ梱を荷車につけて居る所へ顔を出して言ったが、私には露骨に伯父の底意が感じられた。作治と此頃歩き出したばかりの春治とは、雪解の水をペチャペチャ藁靴わらぐつで跳ね散らかして負けまいと荷車について来る。別家までは五町とは無かった。が私は非常に遠い気がした。祖母は流石に私達を気の毒がり、伯父の関係して居る幾つかの事業の一つである酒造会社に私を働かせるように伯父にすすめて呉れた。私としても某所で働き、母と共に暮らしたかった。が伯父は「村に居ては兎角外聞悪くていけないから」とばかりで取合わぬらしかった。夏になると私は上京して今の主人の許に働く事になった。

途中私は徴兵に行ってる八重二の家で荷車を借り、やけにガラガラ曳いて帰った。別家の当主、お婆さん、近くの徳五郎、従兄、それにすぐ後から伯母もやって来た。作治は脳が悪かったから死んだ方が仕合せだったかも知れない、生きてたら却って苦勞の種だったから——そう言う意味の事を当主、伯母、徳五郎が私に言った。私は頭を下げた。が、私は言葉の一端に強い反感を感

じた。脳膜炎をやつて以来作治はぼんやりしていたが性質がよかつた。外の弟たちは菓子などを貰うとガツガツして奪い合う場合でも、作治だけはおとなしくして居た。それに兄弟には珍らしく眼がクリクリと愛らしく誰からも可愛がられる方だった。私は意地でも今少し生かして置きたかつたと思つた。

おもや 母家の方から出て来た母が私の顔を見ると、

「棺にする箱見つからないがなあ」

とがっかりした顔で言つた。

「ビール箱にしたらどだべ」

従兄が母に言つた。

「ビール箱だば中にしきり板あるべ」

別家の当主がそれに答えた。

「そだら茶箱は」

「町と違つてそんなもの無かべせ」

「そうかなあ」

「どんな箱だつてよかべせ」

「しきり板取つたらビール箱でも間に合うすべ」

伯母が横から、

「店屋さ行けば手頃な箱なんばでもあるして」

と私の顔をぬすみ見て言つた。

聞いていて私は彼等の面上へペツと唾でも吐きかけてやり度い気がした。伯母たちから棺桶を買って貰う気は無かった。が、私としてはせめて木香の高い新しい棺に作治を入れてやり度いは山々だった。

近くの万屋よろずやの店先に、五分板の手頃な箱が直ぐ見つかった。赤子をおぶった七ツ八ツの女の子が、俯伏せに置いた箱の上に腰かけ、両足をブランブランさして居た。そばに立って居る妹らしい女の子が、鼻を鳴らして乗りたがった。姉は箱を降り、自分より体の大きいような妹を精一杯で抱き上げた。抱いた妹と背中の赤子の重みでよろけながら……私は子守ばかりさされた自分の小さい頃を想わされた。

「あつちさ行け行け」

母親が出て来て子供達を退かした。私はその箱を担いで戻った。

「これも入れてやるべ」

着て居たものの外に、作治が大事にして大きいことから段段と小さいのを積み重ね紐で結えてあるバツチ（東京で言うメンコ）を母が箱の中に入れた。私は棺を釘づけにした。釘は残忍に弟の骨身に突き通って行くようであった。私の手はひるみ、釘はよろめき折れた。

「町さ行く用でもあればいいどもなあ」

「大儀だなや、一日がかりだから」

従兄と当主はこんなに話し合い、母たちも皆荷車のあとについて門まで出て来た。

「大儀だなや」

と当主が言った。皆も門の前で立ち止り、同じ事を言った。

「なに、大丈夫だす」

言うと同時に私はハッと吾れに帰った。

誰もついて来て呉れない……私は急に死んだ作治がたまらなく可哀そうになった。

町の寺までは一里半ある、それは持病で寝たり起きたりの母にも、四つと七つの弟たちにも遠過ぎた。で私は伯父の家のものか誰かが、ついて来て呉れるものと独りできめ込んでいた。私は誰か一人でも一緒に来て呉れることを作治のために希いながら、幾度も振返って見た。

幾度も振返るうちに、私は自分の眼が憐れみを乞うような表情になって居るのを感じた。

見送って居る皆の顔がよく分らなくなった。が誰も来そうでない、私は自分がその箱を貰って担いで帰ったとき、従兄たちが首を鳩めて何かひそひそ相談事をして居たのを思い出した。

「正、正」

暫らくしてうしろで伯母の声が出た。

私は振り返った。

伯母は汚ない藁箆わらむしろうを引き摺り白い埃を上げて駈けて来た。

「これを上さかけて行けせ、余り見たくないから」

私は思わず眉を顰めた。伯母はかまわず下げて来た雨晒しの箆の塵を空いた手でハタハタ叩いた上で棺にかぶせた。見るから汚ならしく我慢がならなかった。屍までけがされた。そういう気が烈しくした。

「かけない方ましだべ、こんな汚いもの」

声がふるえた。

「それでも、余り見たくないからせ」

伯母は白々しい顔で言った。が母の立場を考えると、それ以上此処で伯母と小競合こせりあいする訳にはいかなかった。私は自分の顔が怒りのためにひどく歪んで居るのを感じながら、再び黙って荷車を曳き出した。

部落を出外れる辺りに大きな二木の櫛けやきがある。その下の溝板に与四郎が立って、私の近づくのを待って居た。

「今行つて見るべと思つて居たに、もう出かけるのかや」

死んだ父とは若い頃親しい間柄で、一緒に東京に出、日雇などしながら夜学に通つたりした事もあつたが、何かの折に帰り、其儘居着いて自分持ちの少しの田畑で百姓をして居る与四郎は、私たち一家を気の毒がり、何かと世話して呉れていた。与四郎は待ち切れず此方に少し歩いて来た。

「なんだお前、そんな汚いものかけて」

「本家の伯母が、見たくくないって」

私は梶棒を降ろし、黒ずんだ汚い蓮を棺からひつぺがして路ばたに捨てた。

「そだらいいものある、いいもの」

与四郎は勢い込んで家の中に駈け込み、花莫蔭はななしざを抱えて直き引き返して来た。

「この方余つ程見栄えするべせ」

二人でそれを棺にかけた。それは盆とか祝儀とかにつかうものでまだ新しかった。紫、赤、黄などの模様がついて居る。がそれも、私には美しく見えた。棺が清められた気がした。

振り返ると車輪の向うに、尻端折をした与四郎の毛むくじやらの足が見える。私はやわらいだ気持でセッセと荷車を曳いて居た。

野良着の上に裾のバサバサになった墨染の衣を着た留守居の爺さんが出て来て、暗い須弥壇しゅみだんに燈明を上げ、一しきりお経を唸った。棺は荷車から降ろし、本堂の入口の敷居に寄せかけて置いた。

私と与四郎は焼香した。神田の相当聞えた割烹店の大袈裟な石造の墓所のうしろの一坪にも足りない地所に、私の家の卒塔婆がゴチャゴチャ立って居る。私は父の卒塔婆のかたわらの土を、鍬で掘り下げた。深ければそれだけ作治の身にも温い気がして、出来るだけ深く掘った。段々に赤い柔い美しい土が出て来た。その底に棺を入れた。

「先ずお前さんからやれせ」
と与四郎が言った。

私は最初両手で土を揉み揉み少しずつ落してやった。赤い土くれがコロコロ楽しげに落ちて行き、棺の上に積って行った。与四郎も同じ事をした。その上で私は鍬で土をかぶせた。棺は見えなくなつて了つた。

「降つて来る景色だんて、早く帰れせ」

与四郎はそう言つて墓地を出て行った。町で雑貨屋をして屠る次男の許に行くのだった。秋の雲がせわしく空を流れて居た。

卒塔婆と青竹を立て、本堂の裏の芝生を一鍬握り起して来て土饅頭の上に貼りつけた。それか

ら荷車に棺と一緒につけて来た赤い椀の飯と菓子を供え、最後に線香を上げた。その線香の火を消そうとするように大きな雨粒が落ちはじめた。

今立てたばかりの真新しいもの、それほど古くなって居ない父のもの、その先に死んだ兄や弟たちのもの、雨は直きにそれ等の卒塔婆を黒々と濡らして行った。

私はまた燐寸を摺って残りの線香に火を移した。煙りは一寸立ち迷っただけで直ぐ消えて了った。私は情ない気がした。

新しい卒塔婆の墨が汚なく垂れ流れた。その上をピシヤピシヤ雨が跳ね返った。が私は立上る気がしなかった。サアツと横しぶきに気ぜわしく降りしきる中に、私は縛りつけられたように屈み続けた。十二、三の頃、「貴様程子供ぎらいな奴はない」と父に言われた言葉が浮んで来て、胸に鈍い痛みを感じさせた。

小学校に上らないうちから私は子守ばかりさされた。私は次から次と生れて来て自分を縛りつけて離さない弟たちを憎んだ。私は遊ぶという気がして遊んだ事が無かった。有りつただけの駄々を捏ねた揚句、遠足に出かける。私は不満と辱められた気持で帰って来た。母が縫って呉れるぼろ着物は私に苦痛を与えた。遊んで居る子供たちが羨ましかった。ある夜私はフト眼を覚まされた。私は畳に投げ出されて居た。自分の寝て居た蒲団には、小さい肉塊が寝かされてあった。それは夜中に生れた国治だった。私は泣いて蒲団をひったくった。生れたばかりの赤子は異様な声を出した。父が烈しく私の横面を叩いた。実際何かの悪意の様に、弟たちは生れては死に、死んでは生れた。部屋の中では兄弟の唾み合いと泣声が絶えなかった。その喧騒の中にもう一つの悲鳴のような新しい生命の産声を聞いたとき、言い難い憎しみが私の体を慄わした。(それを想い

出す度に私はやりきれない気持ちになった。障子の穴から空っ風の吹き込む冬だった。二つになる国治が麻疹はしかになった。それが上の貞治にうつった。ひと冬の間に二人の弟は、流しもとの雑巾のように凍えて了った。病気の為、国治と貞治が寝ていた蒲団に私はのびのびした気持ちで寝た。救われたと言う気がした。頭数が減ればそれだけ飢えから救われることが出来る。あさましい事だが無意識にその気持はあつたに違ひなかつた。私にはすべての原因が父にある気がした。私は父と顔を合わせる事を恐れ、また父の顔を見ないようにした。尚更口をきくことは固く避けた。そして一度も「父ちゃん」と親しく呼びかけないうちに、三年前の冬のはじめ、父は急病になった。私は芝のある電球屋で小僧をして居た。私は其処から駆けつけた。急性肺炎で父はひどい苦しみを続けた。危篤になった。私は悲しいという気がしなかつた。医者も親戚のものも「もういけない」と話し合つた。病氣は父の咽喉を塞いでいた。父は話声を聞きつけ、咽喉を突き破るようにして「死なない、まだ死ぬ訳には行かない、子供達を残して死ぬるもんか……」という意味の事をしつこく繰返した。病氣が咽喉に上つて来て居る父としては、それは乱暴だった。その為にく息をひきとつて了った。がその言葉は烈しく私を打った。私の眼からは涙があふれ出た。暫らく頭を上げることが出来なかつた。私は必死になつて看病した。どうかして父を生かしたいと思つた。私は二言三言父と口をきいた。それが自分には父と始めて口をきいた様な気がした。父と心のとけ合つた言葉を交わした事の嬉しさの為に私はまた泣いた。父はズツと本所の小さな鉄工場に働いて居たが、私の物心つく頃には洋服屋の下請負仕事をして居た。子供達の泣いたり喚いたりする中で父は終日コツコツ仕事をして居た。私は小学校を四年で止めて給仕になり、その後は菓子屋の小僧、電報配達、電球屋の小僧、役場の小使、家主の集金という風に仕事を変えた。

この間の上からのしかかって来る苦しい圧迫は私に、自分の敵は兄弟でも父でもないことを教えて呉れた。そして死んだ父は好人物で実直過ぎる程実直な人間として段々はつきり私の心に浮き上って来て居た。

雨はやんでいた。急に寒気がし出した。私はぐしよ濡れになって居た。

卒塔婆は黒々と濡れ、雫が光りながら垂れ流れて居た。皆が皆生きる事の出来なかつた私達一家では、骨肉の死は私を生かして居た。私は骨肉に向つて復讐を誓つた。

田圃に出ると美しい夕映が見られた。

がそれは直き消え、矢萩野にかかる頃はすっかり暮れた。振り返ると町の燈火がチラチラ揺れ動いて居た。

路の右側が昔の礫はりつば場で、亡霊が出ると言われている芒すすきや小松の生えた荒蕪地だった。兎に角薄気味悪く襟元が寒くて仕方なかつた。

矢萩野が尽きると上り路になり、それからの山路が大変な気がした。生憎の闇夜で鼻の先も見えない。私はただ寺から借りて来た提灯の明りが周囲の闇から丸く切り取って見せる地べたを見ながら進んだ。不気味な静けさの中に、荷車の音だけがイヤに耳につく。そのこだまがカタカタカタカタと遠くから別な荷車の音のように返って来るのも気が悪い。体が段々硬ばって来る。恐怖が次第に呼吸を止めて行くような気がした。

が暫らくすると体が楽になった。疎んで居た足がスクスク伸びて来た。母よりも誰よりも、脳の悪い眼のクリクリと可愛いらしい作治が何時も私の行途を塞いで居た。作治を思うと私はきまつて意気地ない気持ちにさされた。がその作治も死んだ、という意識が初めてはつきり感じられ

た。自分の道を真っ直に行けるように、作治は私の前から退いて呉れたに違いない。路は展けて居る。私は腹に力を感じ、水溜りを蹴散らかして、ドンドン上り下りの烈しい路の闇を進んで行った。

底本.. 「日本プロレタリア文学集・10」新日本出版社

1985（昭和62）年11月25日 初版

初出.. 「文藝戦線」

1928（昭和3）年12月号

入力.. 伊藤時也

校正.. 伊藤時也

2012（平成24）年3月30日